

KATE Newsletter

関東甲信越英語教育学会 編集委員会

No.116 July 10, 2022



CONTENTS

巻頭言「会長就任のご挨拶」(西垣知佳子)	2
【特集1：新役員・各種委員会紹介】	
学会事務局 活動方針(臼倉美里)	3
研究大会委員会 活動方針(飯島睦美)	4
学会誌委員会 活動方針(清水真紀)	4
研修企画委員会 活動方針(物井真一)	5
研究推進委員会 活動方針(加藤嘉津枝)	5
編集委員会 活動方針(森 好紳)	6
新役員・各種委員会一覧	7
学会新ウェブサイトの紹介	9
【特集2：関東甲信越英語教育学会 2021 年度春季研修会】	
1. 授業実践報告(小学校)	
指導と評価を一体化する言語活動の DIAMOND (発表・報告者：石毛宏尚先生)	11
2. 授業実践報告(中学校)	
指導と評価の一体化を目指すための授業づくり (発表・報告者：中島真紀子先生)	12
3. 授業実践報告(高等学校)	
<高等学校>新学習指導要領に基づく評価と授業のあり方 (発表・報告者：村越亮治先生)	13
4. 講演	
英語教師のための3つの新指導法・評価法 (発表・報告者：松沢伸二先生)	15
【研究推進委員会報告】	
第21回 英語教育「なんでだろう？」座談会： 英語教育におけるエビデンス (コーディネーター：臼倉美里／報告者：加藤嘉津枝)	17
【研修企画委員会報告】	
5月月例会：新年度、新たな気持ちで英語教育を構想する—実践と評価の視点から— (発表・報告者：中島義和先生)	18
関東甲信越英語教育学会日誌	19
編集後記	20

巻頭言

「会長就任のご挨拶」

会長 西垣知佳子（千葉大学）

2022年度より関東甲信越英語教育学会（KATE）の会長を拝任いたしました西垣知佳子でございます。就任にあたり、ご挨拶申し上げます。はじめに、長きにわたりご尽力いただいた、前執行部、前運営委員の先生方に心より感謝申し上げます。特に、この2年間はコロナ感染症拡大の苦境にあって、途絶えることなく学会活動を導いていただきました。本当にありがとうございました。

KATEは1976年に設立され、会員数約500名を有する、歴史があり規模の大きい学会です。その学会長という重責を担うこととなり、身に余る思いではありますが、私と同時に就任していただきました理事長の松津英恵先生（東京学芸大学附属竹早中学校）、副会長の加藤茂夫先生（新潟大学）と廣森友人先生（明治大学）、事務局長の臼倉美里先生（東京学芸大学）、役員、委員会委員の先生方といった、素晴らしい方々と力を合わせ、本学会の使命を果たすべく精一杯務めてまいります。

KATEは、英語教育の向上と発展のために、理論研究と教育実践の融合を目指して活動を行っている学術研究団体です。今日の変化の激しい教育界にあって、本学会が果たすべき役割も一段と大きくなっていると感じます。まず、コロナ感染症の拡大を契機として、急速にGIGAスクール構想が進展し、学校ではICTの活用が日常となり、オンラインという授業形態が選択肢の一つとして定着しました。本原稿を執筆中にも、「学校教育の情報化の推進に関する法律」に基づいて、国が初めて策定する「学校教育情報化推進計画」の案が、文部科学省の専門家会議により示されました。この目的は、全ての児童・生徒が学校でICTによる教育を受けられる環境整備を図ることです。さらに、国会では、教員免許更新制を廃止する教育職員免許法の改正案と、2023年4月から教員一人一人の研修記録の作成を任命権者に義務付ける教育公務員特例法の改正案の審議が行われています。その趣旨は、社会が急速に変化する中、教師も高度な専門職として新たな知識・技能の習得に継続的に取り組む必要性が高まっていること、教師の学び方も変化が必要で、新たな教師の学びの姿として、主体的な学び、個別最適な学び、協働的な学び等が求められるということです。

こうした変化の目まぐるしい状況にある今こそ、KATEは、不屈の精神をもって、英語教育の発展に貢献してまいります。そのためにKATEでは、今年度も各委員会の主導のもと、活発に学会活動を行ってまいります。その一部をご紹介します。

- ・ 4月に学会ウェブサイトを見やすく、使いやすくリニューアルしました。
- ・ 5月14日の月例研究会を皮切りに、座談会・読書会、年度末3月の春季研修会を開催します。
- ・ 10月15日に、全国英語教育学会と言語系学会連合と共催で、旧・東京都立大学名誉教授・元学習院大学教授の中島平三先生を講師にお招きして、特別講演会を開催します。
- ・ 12月10・11日に、宇都宮大学をホスト校として、第46回栃木研究大会（オンライン）を開催します。
- ・ 学会誌『KATE Journal』、『KATE Newsletter』、そして『What's New』を発行します。

KATEは新しい体制でスタートいたしました。私どもは、会員の皆さまがKATEを身近な存在に感じ、自由に活発に活動に参加していただけるよう努力してまいります。

特集 1 : 新役員・各種委員会紹介

◇各種委員会の活動方針◇

学会事務局 活動方針

事務局長 臼倉美里（東京学芸大学）

<ご挨拶>

本年度より関東甲信越英語教育学会の事務局長として、事務局次長の奥村耕一先生（情報経営イノベーション専門職大学）、事務局員の佐藤選先生（東京学芸大学）、マルチメディア部門担当（下記参照）の宗像孝先生（横浜国立大学）、野田明先生（鎌倉女子大学）とともに、学会運営全般の事務を担当いたします。会員の皆さまの名簿と会費の管理、学会の出版物の発送手配、各種お問い合わせへの対応、学会運営委員会と理事会の事務統括、全国英語教育学会やその他学会との連携など、一つひとつを丁寧に対処してまいります。COVID-19 の感染状況が未だ収束しない中、会員の皆さまには多大なご不便をおかけすることになるかと思いますが、より良い学会運営に向けて尽力してまいります。

また、本年度から本学会のウェブサイトがリニューアルされました (<https://kate-jp.sakura.ne.jp/>)。これに伴いまして、会員の皆さまの個人情報の更新や会費納入状況の確認は、各会員さまそれぞれがウェブサイトログインして行っていただけるようになりました。お手数をおかけしてしまう部分もあるかと存じますが、ご理解ご協力のほど、何卒よろしくごお願い申し上げます。

本学会の会員数は 479 名（2022 年 2 月末現在）で、地区学会としては中部地区英語教育学会に次いで 2 番目の規模となります。会員の皆さまが年次研究大会、春季研修会、月例研究会、座談会・読書会、学会誌投稿など、学会の各種事業にスムーズにご参加いただけるよう、縁の下の力持ちとして学会運営に携わってまいりますので、今後ともどうぞよろしくごお願いいたします。

<マルチメディア委員会の組織改編について>

新年度を迎えるにあたり、学会運営委員会では、学会事務局及び各委員会の業務内容を見直しました。その結果、マルチメディア委員会は「事務局マルチメディア担当」として生まれ変わることになりました。

これまでマルチメディア委員会は、学会ウェブサイトの管理やマルチメディア講習会の企画・運営、年次研究大会での ICT 機器利用の補助、そして 2020 年度と 2021 年度にはオンライン年次研究大会の運営に尽力してまいりました。このたび、学会ウェブサイトのリニューアルに伴い、マルチメディア委員会の業務内容が大きく変更になり、事務局の業務との連携がより深まったことを受け、「事務局マルチメディア担当」に組織改編することになりました。

会員の皆さまにおかれましては、これまでマルチメディア委員会の活動を支えていただき、ありがとうございました。組織の名前は変わりますが、これからもスムーズな学会運営のために尽力してまいりますので、会員の皆さまにおかれましては、今後とも変わらぬご支援のほど、どうぞよろしくごお願い申し上げます。

研究大会委員会 活動方針

研究大会委員会委員長 飯島睦美（群馬大学）

昨年度の群馬オンライン研究大会には、多くの会員の皆さまにご参加をいただきどうもありがとうございました。2020年度に引き続き、オンラインでの大会となりましたが、大会企画運営に関わってくださった学会運営委員会、群馬研究大会実行委員会の皆さまのご協力のおかげで、無事終了することができました。この場を借りて改めまして感謝を申し上げます。さて、2022年度より研究大会委員会委員長の職を仰せつかりました。過去4年間、本委員会副委員長を務め、運営委員会をはじめ皆さま方にご協力をいただき、学んでまいりました経験も活かし、さらに事務局との連携を深めて研究大会の企画運営を進めてまいります。

ここで研究大会委員会委員のメンバーをご紹介します。副委員長には、羽山恵先生（獨協大学）、山田敏幸先生（群馬大学）のお二方をお願いをしております。さらに小西瑛子先生（常磐大学：兼協賛部長）、保坂華子先生（東海大学）、金子義隆先生（明海大学）、大田悦子先生（東洋大学）、桐生直幸先生（鎌倉女子大学）、砂田緑先生（東京学芸大学）、本田亮先生（神奈川県立津久井高等学校）には委員となっただき、大変心強い体制でのスタートとなります。

研究大会委員会といたしましては、再度オンライン開催となります。2022年度栃木研究大会大会実行委員長の田村岳充先生（宇都宮大学）を全力でサポートし、大会の成功に向けて準備を進めてまいります。学会員の皆さまにおかれましては、ぜひご参加いただき、議論の場にて日頃の教育・研究活動をご発表いただければと願っております。

今、世界は、コロナ感染拡大第7波、そしてロシアによるウクライナ侵攻といった心が痛むニュースが続いております。私たちは、この不安定で見通しの立たないこれからの世界を生きていく子どもたち、若者たちの前にどういった姿で立てばよいのでしょうか？ 少なくともいえることは、私たち教育者こそ、自己研鑽に努め、ぶれない教育理念、揺るがない credo を胸に秘めて教育活動に勤しむ必要がある、ということではないでしょうか。学会員の皆さまとともによりよい教育活動ができるように、研究大会が皆さまにとって充実したものとなりますように努めてまいります。皆さまの一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

学会誌委員会 活動方針

学会誌委員会委員長 清水真紀（群馬大学）

本年度より学会誌委員会委員長を務めさせていただいております。関東甲信越英語教育学会誌（『KATE Journal』）は年1回の発行で、発行数はこれまで35号を数えます。学校等の現場で英語教育の実践及び研究に取り組まれている先生方、修士論文や博士論文の執筆に取り組まれている大学院生の方々にとっても身近な学会誌の一つだと思います。

近年の『KATE Journal』の変更点として投稿時期の変更が挙げられます。これは、関東甲信越英語教育学会の研究大会が2020年度より12月開催になり、学会誌の投稿締切りも1月下旬になりました。幸い、投稿数はこの2年間で増加しており、さらに質の高い論文が集まってきているのを実感しています。最新号（第36号）も今年9月頃に会員の皆さまにお届けできる予定です。

学会誌委員会の伝統は、ちょうど2年前の加藤茂夫前委員長のお言葉にもありますように「入念な査読プロセスと丁寧な投稿者へのフィードバック」にあります。1編の査読に対して委員2名からのコメ

ントが4ページ近くに及ぶことも珍しくありませんが、学会が目指す学会誌掲載レベルに達してもらいたいという委員の思いであると受け止めていただければ幸いです。

新委員会の構成は、副委員長に神白哲史先生（専修大学）、土方裕子先生（筑波大学）を迎え、編集委員として伊佐地恒久先生（岐阜聖徳学園大学）、石井雄隆先生（千葉大学）、片桐一彦先生（専修大学）、今野勝幸先生（龍谷大学）、星野由子先生（千葉大学）、そして査読委員として内野駿介先生（北海道教育大学）、大場浩正先生（上越教育大学）、田頭憲二先生（東京家政大学）、半沢蛍子先生（東京理科大学）、深澤真先生（琉球大学）、マキュワン麻哉先生（早稲田大学）、物井尚子先生（千葉大学）、森本俊先生（玉川大学）、山田敏幸先生（群馬大学）、山野有紀先生（宇都宮大学）の計18名の先生方です。英語教育の各領域でご活躍され、経験豊富な先生方に委員をお願いできることをとても心強く感じております。より一層の『KATE Journal』の発展のために委員一丸で尽力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

研修企画委員会 活動方針

研修企画委員会委員長 物井真一（筑波大学附属高等学校）

日本の英語教育が大きく変わりつつある今、現場の英語教師にとって研修の場がより重要な役割を担うようになってきています。研修企画委員会では、小中高大の先生方による研究や実践発表を行っていただくため、二ヶ月に一度程度の月例研究会、年度末の春季研修会を開催しております。会員の皆さまにとって研究と実践をつなぐ場、そして、お互いの親睦を深める場となるよう、より質の高い月例研究会、並びに春季研修会の企画・運営をめざしてまいります。会員の皆さまのご参加を委員一同、心よりお待ちしております。月例研究会につきましては、決まり次第ホームページおよびメーリングリストにてお知らせいたしますので、ご確認いただけますと幸いです。また Twitter (@KATE14649676) でも随時最新の情報を発信しております。

今年度は合計12名の委員でより充実した研修の企画・運営を目指し活動してまいります。メンバーは、副委員長を渡邊聡大先生（海城中学高等学校）、委員は荒川洋一先生（埼玉県立伊奈学園総合高等学校）、石井潤先生（文教大学付属高等学校）、川口純先生（順天中学校・高等学校）、塩飽りさ先生（筑波大学附属高等学校）、末森咲先生（筑波大学）、関口友子先生（東京都江東区立豊洲小学校）、竹内まりや先生（共立女子中学高等学校）、根岸加奈先生（軽井沢風越学園）、福田ステーブ利久先生（文教大学）、若松直樹先生（桐光学園中学校・高等学校）にお願いしました。今年度も研修企画委員会をどうぞよろしくお願いいたします。

研究推進委員会 活動方針

研究推進委員会委員長 加藤嘉津枝（日本大学）

研究推進委員会は、英語教育に従事している先生方や教員を目指している学生の皆さま、その他英語教育に携わっている方々に、英語教育研究を、かたいものではなくもっと身近なものとして感じていただくことを目指して活動を進めております。主な活動内容は「英語教育『なんでだろう?』座談会」と「出張! 英語教育なんでも読書会」です。研究推進委員会の活動を通して、皆さまが英語教育研究に足を踏み入れるお手伝い、きっかけ作りができればと願っております。

メンバーは、新しい副委員長に高木哲也先生（筑波大学附属高等学校）を、そして新しい委員として田中広宣さん（東京大学大学院博士課程）を迎え、加藤嘉津枝（委員長）、高木哲也先生（副委員長）、青田庄真先生（茨城大学）、伊藤泰子先生（神戸外語大学）、井戸聖宏先生（早稲田中学校・高等学校）、白倉美里先生（東京学芸大学）、大關晋先生（日本大学第二中学校・高等学校）、後上雅士先生（早稲田中学校・高等学校）、駒形知彦先生（学習院中等科）、佐藤選先生（東京学芸大学）、鈴木祐一先生（神奈川大学）、砂田緑先生（東京学芸大学）、田中広宣さん、田辺博史先生（青山学院高等部）、冨水美佳先生（昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校）、松津英恵先生（東京学芸大学附属竹早中学校）、矢部隆宜先生（目白研心中学校・高等学校）の17名です。

編集委員会 活動方針

編集委員会委員長 森 好紳（白鷗大学）

久島智津子前委員長（津田塾大学）の後任として、編集委員会委員長を拝命いたしました。コロナ禍で対面の機会が以前より減っていますので、会員の皆さまに役立てていただける英語教育の研究・授業実践の情報共有により一層力を入れてまいります。具体的な活動としては、年次研究大会の『発表要綱』や『KATE Newsletter』を発行しております。年次研究大会の『発表要綱』の制作では、発表される先生方の研究・授業実践を参加者の皆さまに共有していただけるよう、見やすくかつ分かりやすい誌面を目指して制作を進めてまいります。

『KATE Newsletter』は昨年度と同様に、7月（夏号）と3月（春号）の年2回の発行を予定しています。夏号では春季研修会、春号では年次研究大会を特集し、どちらの号でも月例会などの各種委員会の報告を掲載します。ご登壇された先生方や参加者の皆さまには取材や発表内容・感想などのご寄稿をお願いしております。各イベントへのご参加が叶わなかった会員の方々にも情報をお届けできるよう、ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。また、このNewsletter 116号からは利便性の向上のため、紙媒体の郵送に加え、メーリングリストによる電子版の配信や学会ウェブサイトにおけるアーカイブ化も予定しております。

今年度は、副委員長の田中菜採先生（日本大学）、伊東賢先生（茨城工業高等専門学校・筑波大学大学院生）、小木曾智子先生（富山大学）、神村幸蔵先生（筑波技術大学）、佐々木大和先生（帝京大学）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、細田雅也先生（北海道教育大学）、筑波大学大学院生の小野由香子さん、工藤大奈さん、小室竜也さん、三上洋介さん、水書亮さん、明治大学大学院生の檜村祐志さんと合計14名の委員体制で活動を行ってまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

◇新役員・各種委員会一覧◇

会 長 西垣知佳子

副会長 加藤茂夫 廣森友人

理事長 松津英恵

理事

(都県名：50音順)

[茨 城] 浅見道明	[神奈川] 田邊祐司	[群 馬] 伊藤文彦	[埼 玉] 小林美音	[千 葉] 大井恭子 酒井志延
[東 京] 片山七三雄 金枝岳晴 金子朝子 高田智子 中村優治	[栃 木] 大嶋浩行 田村岳充	[長 野] 赤地憲一 桐井 誠	[新 潟] 中村博生 松沢伸二	[山 梨] 三枝幸一 堀田 誠

*上記に加えて、会長委嘱により各委員会委員長・副委員長・事務局長・事務局次長が理事を兼任する。

事務局

事務局長 白倉美里 事務局次長 奥村耕一

事務局員 佐藤 選 マルチメディア担当 野田 明 宗像 孝

研究大会委員会

委員長 飯島睦美 副委員長 羽山 恵 山田敏幸

委員 大田悦子 金子義隆 桐生直幸 小西瑛子 砂田 緑 保坂華子 本田 亮

学会誌委員会

委員長 清水真紀 副委員長 神白哲史 土方裕子

編集委員 伊佐地恒久 石井雄隆 片桐一彦 今野勝幸 星野由子

査読委員 内野駿介 大場浩正 田頭憲二 半沢蚩子 深澤 真

マキュワン麻哉 物井尚子 森本 俊 山田敏幸 山野有紀

研修企画委員会

委員長 物井真一 副委員長 渡邊聡大

委員 荒川洋一 石井 潤 川口 純 塩飽りさ 末森 咲 関口友子

竹内まりや 根岸加奈 福田スティーブ利久 若松直樹

研究推進委員会

委員長 加藤嘉津枝 **副委員長** 高木哲也
委員 青田庄真 井戸聖宏 伊藤泰子 白倉美里 大關 晋 後上雅士
駒形知彦 佐藤 選 鈴木祐一 砂田 緑 田中広宣 田辺博史
富水美佳 松津英恵 矢部隆宜

編集委員会

委員長 森 好紳 **副委員長** 田中菜採
委員 伊東 賢 小木曾智子 小野由香子 樫村祐志 神村幸蔵 工藤大奈
小室竜也 佐々木大和 鈴木健太郎 細田雅也 三上洋介 水書 亮

運営委員会

運営委員 飯島睦美 白倉美里 奥村耕一 加藤嘉津枝 加藤茂夫 神白哲史
清水真紀 高木哲也 田中菜採 西垣知佳子 羽山 恵 土方裕子
廣森友人 松津英恵 物井真一 森 好紳 山田敏幸 渡邊聡大

*運営委員会は会則第 11 条に則り、会長・副会長・理事長・事務局長・事務局次長・各委員会委員長・副委員長から構成されている。

会計監査 杉田千香子 廣瀬浩二

名誉会長 野田哲雄

参与 石丸玲子 坂永佑嘉 佐藤文俊

KATE 所属の全国英語教育学会役員

副会長 斉田智里 (2022 年 4 月—2024 年 3 月)

理事 西垣知佳子 (2022 年 4 月—2024 年 3 月)

理事 加藤茂夫 (2022 年 4 月—2024 年 3 月)

幹事 白倉美里 (2022 年 4 月—2024 年 3 月)

紀要編集委員 清水真紀 神白哲史 土方裕子

紀要査読委員 磯 達夫 伊藤泰子 大野真澄

神白哲史 加藤茂夫 工藤洋路

古賀 功 清水真紀 中村優治

濱田 彰 土方裕子 星野由子

◇学会新ウェブサイトの紹介◇

関東甲信越英語教育学会では会員の皆さまに有益な情報をお届けするため、『KATE Newsletter』や『What's New』を郵送でお送りしております。また、メーリングリストを配信し、インターネット上ではTwitter (@KATE14649676) やウェブサイトでも情報を発信しております。今年度からウェブサイトがリニューアルされ、今後は新しいウェブサイトで情報が更新されていきます。新旧ウェブサイトのURLは以下の通りとなりますのでご注意ください。ぜひ、新ウェブサイトをブラウザの「お気に入り」「ブックマーク」などに登録していただけますと幸いです。また、新ウェブサイトのトップページも合わせて掲載いたします。

- ・ 旧ウェブサイト：<http://www.kate-j.sakura.ne.jp/>
- ・ 新ウェブサイト：<https://kate-jp.sakura.ne.jp/>



旧ウェブサイトの機能は新ウェブサイトに通し引き継がれています。画面左側には各種お知らせが表示され、右側にはウェブサイトの更新情報やサブメニュー（会則、投稿規定、過去のイベントの記録など）、Twitter、JASELE や他地区学会へのリンクが表示されています。画面上部にはメニューが並び、その機能・内容は以下の箇条書きの通りです。また、スマートフォンでアクセスすると、各種お知らせだけが表示されて見えますが、画面右上の【☰】をタップすると各機能が表示されます。

- ・ HOME：トップページに戻る
- ・ 研究大会：研究大会の更新情報、研究大会ウェブサイトへのリンク
- ・ 入会について：会費の金額や振込の時期、振込先口座など
- ・ お問い合わせ：問い合わせ用ウェブフォーム、学会事務局の連絡先
- ・ ログイン：各会員の個人情報



新ウェブサイトの新機能としましては、これまで学会事務局を通して行っていた会員情報の更新を会員の皆さまがご自身でできるようになります。また、これまでは振込用紙を使って学会費をお支払いいただきましたが、近日中に新ウェブサイトでは学会費のカード決済ができるようになります。いずれも新ウェブサイトにログインしてご利用いただく機能ですが、本稿ではログインの方法、および本稿執筆時点で利用可能な会員情報の更新方法について、ご紹介いたします。

<初回ログインとパスワード設定の流れ>

1. 新ウェブサイトで「ログイン」をクリックします。
2. 初回ログイン時、またはパスワードを忘れてログインできない時は、右の1つ目の図（ログイン画面）で「パスワード再発行」をクリックします。
3. 右の2つ目の図（パスワード再発行の画面）に、会員番号と学会に登録したメールアドレスを入力します。会員番号は、5月に『What's New No. 54』が郵送された封筒の宛名シールに記載されています。もし紛失された場合は、新ウェブサイトの「お問い合わせ」からご連絡ください。
4. 「再発行」をクリックすると、入力したメールアドレスに、パスワードが送信されます。
5. 「ログイン画面」でID（会員番号）とパスワードを入力し、「ログイン」をクリックします。

<ログイン後の会員情報更新の流れ>

1. 新ウェブサイトではログインすると、画面左側のウェブサイトの更新情報やサブメニューなどと一緒に、「PROFILE」が表示されるようになります。スマートフォンの場合は、画面右上の【≡】をタップすると表示されます。
2. 「PROFILE」の中の「プロフィールを見る」をクリックすると、現在登録されている会員情報を確認できます。会員情報に変更が生じた場合は、画面最下部の「修正」をクリックします。
3. 氏名、メールアドレス、パスワード、住所、所属などの会員情報が編集可能になります。情報の更新後、画面最下部の「以上の入力情報に相違ありません」にチェックマークを入れ、「更新」をクリックすると、会員情報の更新が完了します。

新ウェブサイトでは、学会事務局の仲介が不要のため、即座に会員情報を更新していつでもその内容をご確認いただけます。また、カード決済が始まると、振込用紙に記入して銀行に行く手間が省けるようになります。会員の皆さまが本学会を利用されるにあたり、新ウェブサイトによって各種手続きが効率化されれば幸いです。もしご不明な点がございましたら、問い合わせ用ウェブフォームや学会事務局メールアドレスまで、どうぞお気軽にご連絡ください。

特集 2 : 関東甲信越英語教育学会 2021 年度春季研修会

◇授業実践・研究報告を行って◇

1. 授業実践報告 (小学校)

題目「指導と評価を一体化する言語活動の
DIAMOND」

発表・報告者：石毛宏尚

(四街道市教育委員会指導課)

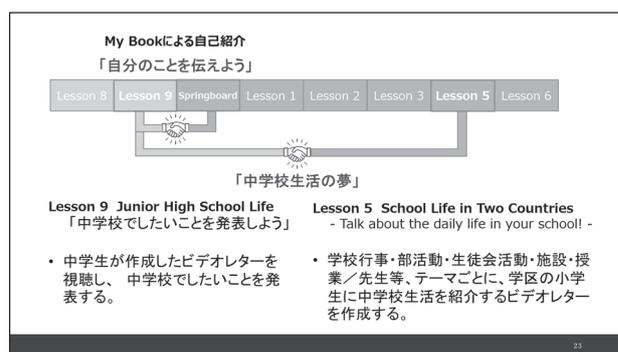
四街道市では、小中一貫教育の大きな柱として、英語教育推進モデル校の2年間の実践をもとに、令和2年度から市内全小学校を文部科学省の教育課程特例校に申請し、小学校1年生から外国語科をスタートさせました。発達段階に合わせ4技能5領域をバランスよく指導していく本市の外国語教育の実践を紹介させていただきました。

1. カリキュラム連携プログラム

本市では、小中一貫教育の完全実施により、情報交換や交流については盛んに行われていますが、具体的なカリキュラムの連携を図ることで、更に小中一貫教育を充実させるべく、特に重要となる小学校6年生と中学校1年生という接続期の連携について、四街道市小中連携外国語科カリキュラム連携プログラムを作成しました。

①「中学校生活の夢」

中学校1年生が、Lesson 5 School Life in Two Countries で日本とオーストラリアの学校生活の違いについて取り扱った単元を学習後、自分の学校について学区の小学校6年生に向けて英語で紹介するビデオレターの作成を行います。小学校6年生は、Lesson 9 Junior High School Life の中で中学校の学校紹介ビデオレターを視聴し、中学校生活の概要を理解した上で、中学校生活の抱負を英語で発表します。

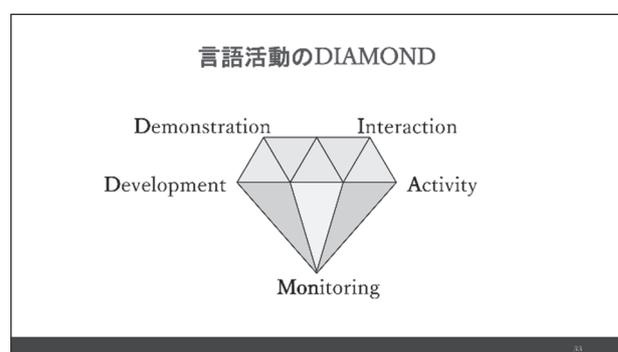


②「自分のことを伝えよう」

小学校6年生は、Lesson 9のPlus Activityで、既習の表現を用いて自分自身のことについて書いてまとめる教科書巻末のMy Bookの作成を行います。中学校1年生に進学した際、授業開きSpringboard 1 Nice to Meet You!において、My Bookをもとに自分自身のことについて伝え合う自己紹介活動を行います。

2. 言語活動のDIAMOND

英語教育推進モデル校の実践の中から見えてきた中間評価に重点を置いた指導手順を「言語活動のDIAMOND」と名付け、共通指導事項として市内各小学校で実践していただいています。言語活動をやらせっぱなしにせず、机間指導から適切なフィードバックを全体に返し、コミュニケーションを改善するチャンスを与えることが大切です。



① Demonstration (T-T)

HRT (学級担任) と ALT で活動のモデルを示します。この際に、あえて悪い例も演じることで、活動の評価基準を示すことができます。

② Interaction (T-S)

指導者の会話を聞かせるだけでなく、児童を巻き込んでいきます。Demonstration の質問を数名の児童に振り、活動の進め方を確認し、コミュニケーションのイメージを膨らませます。

③ Activity (S-S)

児童同士でやらせる際、日本語を使ったり、ワークシートやカードを見せてしまったりしないよう、机間指導しながら確認します。

④ Monitoring (T-S)

一度活動を止め、よい例を見つけたら具体的に褒めた上で、クラス全体に共有します。褒められた生徒の自己有用感を高めるだけでなく、中間評価を行うことで、コミュニケーションの質の改善を図ります。

⑤ Development (S-S)

コミュニケーション改善の気づきを促し、もう一度取り組むチャンスを与えます。最初の活動よりもよくなっていた点について具体的にフィードバックします。

今回、オンラインで発表する機会をいただき、雑駁ではありますが本市の外国語教育の概要を紹介させていただきました。参加者の皆さまからたくさんのご質問・ご感想をいただき、お礼申し上げます。ありがとうございました。

2. 授業実践報告（中学校）

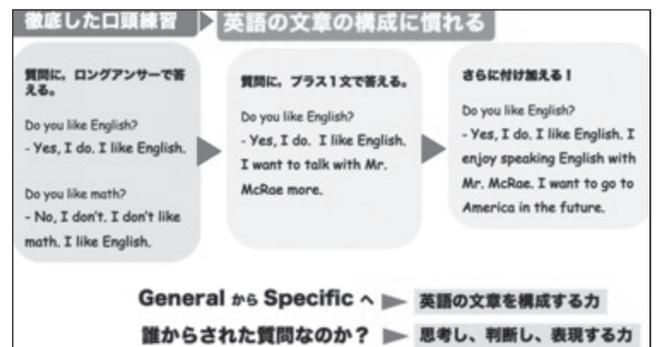
題目「指導と評価の一体化を目指すための授業づくり」

発表・報告者：中島真紀子

(筑波大学附属中学校)

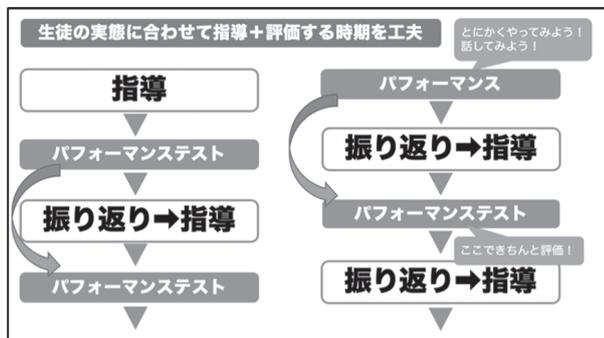
この度、関東甲信越英語教育学会春季研修会という大切な場において、授業実践報告の機会をいただき心より感謝申し上げます。「新学習指導要領における指導と評価の一体化の実現に向けて」というテーマをいただいた時、私自身の日々の思いをお伝えできる貴重な機会になる、と嬉しく思いました。

中学校では 2021 年度に新学習指導要領が施行され、大きな変化が求められる年となりました。特に評価に関しては多くの先生方が混乱され、不安を抱えていらっしやったのではないのでしょうか。もちろん私もその 1 人でした。一昨年度から、評価についてお話しする機会をいただくことがたびたびありましたので、何度も学習指導要領や評価に関する資料を読み返し、現場にあてはめて想定してみました。しかし、どんなに繰り返してみても「机上の空論」を述べているようにしか感じられず、心苦しい時間でした。この 1 年を終えてみて、恥ずかししながら、やっと少しクリアになってきたような気がします。



「思考・判断・表現や主体的に学習に取り組む態度とはどのように評価するのか」「新しい3観点で評価するためにどのようなテストをするべ

きなのか」…このような声を聞くたびに、何か違和感のようなものを感じずにはられませんでした。それは「評価」だけにフォーカスされて聞こえていたからだ、今になって思います。



「評価をどうするか」の議論の前に、「新しい3観点は、評価をするためだけのものではなく、授業を見直すためのものである」と発想の転換を行う必要性をずっと感じていました。目指す生徒像を明確にし、その姿に向けてより質の高い授業を目指す、という良い循環をつくることで、自ずと「評価の仕方」も見えてくるのではないかと。そのためには計画的に授業を進めることの大切さや日々の授業の積み重ねが大切であると考えていました。そして、この研修会にてその思いを伝えることができたと考えています。

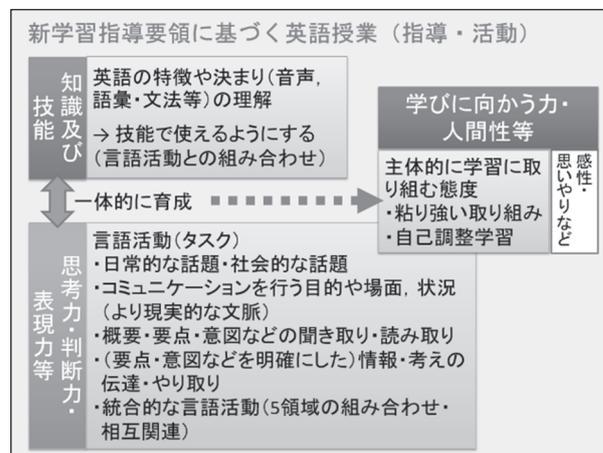
**生徒を評価した結果は、
教師自身の指導の評価でもある。
自分自身の指導を
見直すよいチャンス！**

忙しい日々の中で、自分の授業を見直し、改善していくことはとても大変なことです。雑務に時間も心も奪われがちな私自身への自戒の念も込めて、今回発表させていただきました。最後に「生徒を評価した結果は、教師の指導への評価でもある」とお伝えしましたが、何よりも私

自身に向けた言葉でした。この実践発表をすることで、自分の授業をもう一度見直すことができ、そして何よりも生徒とともに成長し続ける教師でありたいと、改めて強く思うことができました。

3. 授業実践報告（高等学校）
**題目「＜高等学校＞新学習指導要領に基づく
 評価と授業のあり方」**
発表・報告者：村越亮治（玉川大学）

今回の研修会では、まず、①現行の高等学校外国語学習指導要領に基づく評価の実際について、その問題点を挙げ、次に、②新しい学習指導要領で育成することが求められている資質・能力を授業レベルで概観したあと、③具体的な評価方法の例を提示し、さらに、④シラバスデザイン、授業デザインの例を示しました。



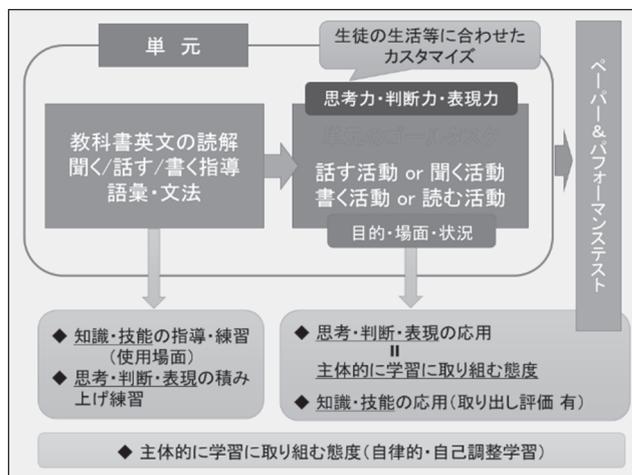
①については、定期テストで既読の教科書英文を出題することの是非、大問ラベリングの齟齬(「語順整序問題」≠「外国語表現の能力」等)、素点の傾斜配分による「形式的観点別評価」の問題などについて述べました。

②では、「知識及び技能」の具体的な指導として、使用場面・働きが結びついた言語材料の理解と応用力につながる練習が必要であること、「思考力、判断力、表現力等」を育成し、その力

を見取るためには、各単元のゴールとして、目的・場面・状況を設定した、4技能5領域を發揮させる言語タスク・テストが必要であること、「学びに向かう力、人間性等」のうち「主体的に学習に取り組む態度」とは、言語活動等への粘り強い取り組みや、主体性を持って学習に臨む姿勢であることを確認しました。

③については、「知識・技能」の定期テスト問題の例、「思考・判断・表現」を見取る、目的・場面・状況を設定した読解テストの在り方、パフォーマンステストの評価ルーブリックの例、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の考え方について述べました。特に懸念されていると思われる「主体的に学習に取り組む態度」については、「思考力、判断力、表現力等」と一体的に評価する、すなわち原則的には上記のゴールタスク・テストの出来ばえに依拠し（「思考・判断・表現」＝「態度」）、必要に応じて適宜調整していく（例：意欲が見られるがパフォーマンスが伴わない→「思考・判断・表現」＜「態度」）、という説明をしました。

識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の「練習」をし、各単元のゴールタスクで「腕試し」をするという仕組みにすること、という説明をしました。



多くの参加者のみなさんから好意的なフィードバックをいただき、ありがとうございました。今後また、違った立場で現場の先生方のお手伝いができれば幸いです。

年間指導計画				
CAN-DOリストの形での学習到達目標(4技能/5領域)				
単元目標 (発表)	単元目標 (読むこと)	単元目標 (書くこと)	単元目標 (聞くこと)	
Lesson 1	Lesson 2	Lesson 3	Lesson 4	
・読解◆ ・聴解◆ ・発話練習◆ ・作文◆ ・語彙文法 ・スピーチ指導● *スピーチ★	・読解◆ ・聴解◆ ・発話練習◆ ・作文◆ ・語彙文法 ・読解方略指導● *読解タスク★	・読解◆ ・聴解◆ ・発話練習◆ ・作文◆ ・語彙文法 ・パラグラフ指導● *1パラ作文★	・読解◆ ・聴解◆ ・発話練習◆ ・作文◆ ・語彙文法 ・聴解方略指導● *聴解タスク★	
L	◆	◆	◆	◆
S	◆	◆	◆	◆
R	◆	◆	◆	◆
W	◆	◆	◆	◆

④では、年間指導計画の中で、CAN-DO が具現化した単元目標（原則的に1技能）をベンチマークとしてゴールタスクを配置し、毎レッスンで行う積み上げ練習とゴールタスクに係る指導を合わせて単元をデザインし、単元間のバランスを取りながら、技能別の指導のタイムラインにも目を配ること、単元内では、教科書で「知

4. 講演

題目「英語教師のための3つの新指導法・評価法」

発表・報告者：松沢伸二（新潟大学）

国の学習評価に関する参考資料を補充する新指導法・評価法として、2連アプローチ、ジャンル準拠教育、複言語主義を紹介した。

3つの新指導法・評価法の内容、実際、背景を順に説明した。内容については、2連アプローチは「小中高の学校英語教育の目標を言語的目標と言語外目標に2分し、2連アプローチで両者を指導・評価して、英語力に加えて児童生徒の『学びに向かう力、人間性等』も伸長する」、ジャンル準拠教育は「小中高生がまとまりのある英語のテキストを理解（聞く・読む）し、表出（話す・書く）する技能を、ジャンル準拠指導・評価を行うジャンル教授法で伸長する」、複言語主義は「必要に応じて複数の言語を用いる複言語使用者を育成するために、英文和訳や和文英訳、それに英文の内容を日本語で要約したり説明したりするなどのメディアーション技能も伸長する」とした。

講演のまとめでは新しい指導要領・要録での評価との関係を確認した。2連アプローチは「主体的に学習に取り組む態度」の評価と個人内評価、ジャンル準拠教育は「思考・判断・表現」の評価、複言語主義は新指導要領で明記されていない英語力の評価、にかかわるとした。最後に、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）が英語学習者を「複言語の持ち駒を動員する社会的エージェントとしての言語使用者・学習者」に位置付け、言語教育を再概念化してその領域を広げたのは、従来のコミュニカティブ・アプローチからの重大な意味を持つ発展であり、言語教育のパラダイム転換であり、日本の学校英語教育の発展に資する新言語教育観である、と結んだ。

講演後に寄せられたコメントには、「本日の講演を聞き、英語においても『学びに向かう力、人間性』を育てることができるということを感じ、

英語教育の大きな可能性を感じた90分であった」、「ジャンル教授法の必要性を最近感じていました。ご紹介いただいた先行研究を読み込み、授業に活用していきたいと思いました」、「複言語使用者の育成においてメディアーションの力が必要であることについて、とても納得がいき、指導が必要であると感じました」などがあつた。

また講演全体については、「日々の実践の裏付け、日々の自分の実践を振り返る良い機会になりました」、「我々現場の教員にとって、明日からの実践へのモチベーションにつながる、有意義なお話を頂きました」、「現場に即した内容ですぐに実践できそうです。年間計画・単元計画・評価の方法・授業内容のイメージが付きまして」などの感想をいただいた。

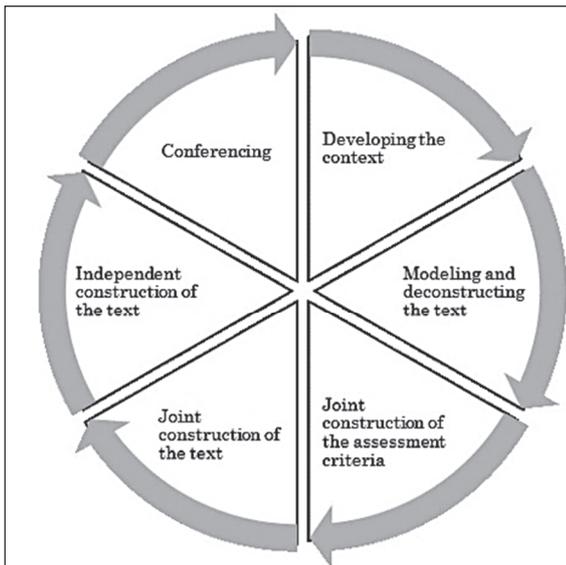
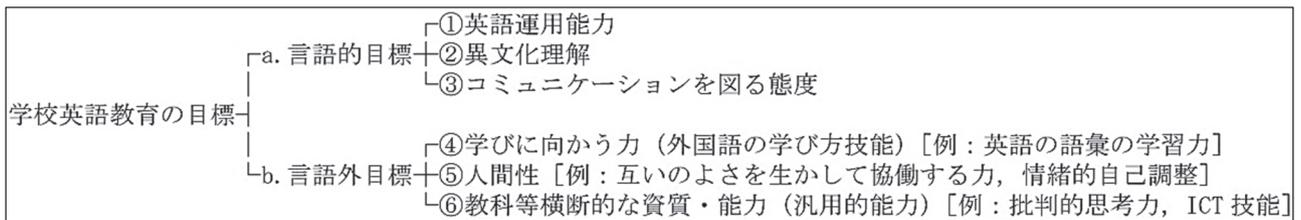
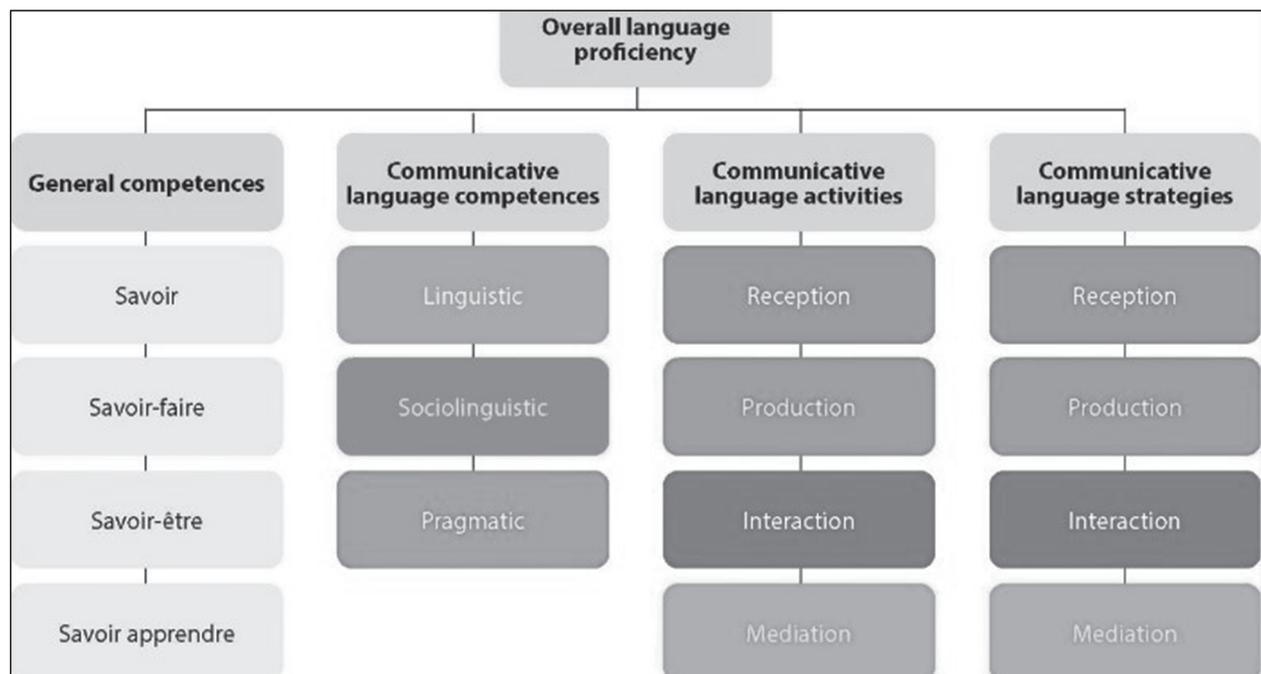


図1 教授学習サイクル (TLC)



図2 練習評価サイクル (PAC)

出典：安宅いずみ・松沢伸二 (2016). 「まとまりのある文章を書く力の指導と評価の改善：ジャンルと学習・練習・評価タスクを用いて」『関東甲信越英語教育学会誌』第30号, 167–180頁. より (172頁)



出典：Council of Europe. (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment—Companion volume*. Council of Europe Publishing. より (32頁) available at: <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4>

◇研究推進委員会報告◇

第21回 英語教育「なんでだろう？」座談会

日時：2022年3月6日（日）10:00～12:00

場所：オンライン（Zoom）開催

テーマ「英語教育におけるエビデンス」

参考書籍『英語教育のエビデンス：これからの英語教育研究のために』亙理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野 研・工藤洋路・酒井英樹 著（研究社，2021年）

コーディネーター：白倉美里（東京学芸大学）

講師：亙理陽一先生（中京大学）

草薙邦広先生（県立広島大学）

寺沢拓敬先生（関西学院大学）

浦野 研先生（北海学園大学）

工藤洋路先生（玉川大学）

報告者：加藤嘉津枝（日本大学）

今回の座談会には、大学生、大学院生、中学校、高校及び大学の先生方など、総勢過去最多 109 名の参加があった。会の前半は、コーディネーターの白倉先生と 5 名の講師の先生方の公開座談会で、白倉先生からの質問をもとに講師の先生方にお話をいただいた。今回のテーマは英語教育におけるエビデンスであるが、エビデンスとはそもそも何かといった基本的な話から始まった。それによると、ここでのエビデンスとは、X すれば Y になるといった因果関係を示唆する証拠で、日常言語で使われる「証拠」「エビデンス」「根拠」という言葉とは違う、かなり狭義の専門用語ということであった。白倉先生からは、「英語教育研究に対する著者の先生方の問題意識や憤りを感じながら本を読んだが、何（誰）に対して憤りを感じているのか？」という率直な質問もあり、以下のような興味深い回答があった。

今の日本の英語教育のこれまでの蓄積をもってしても、こういう教え方をしたらよい、と提案できるだけのエビデンスが揃っていないというのが現状だといえる。にもかかわらず、「エビデン

スに基づいた英語教育の指導法」といったような言葉で、本来エビデンスと呼ぶべきではないものを利用して、指導法の効果を謳っている研究者、出版社のあり方。それを受けて、じゃあ、そういう教え方をしましようという流れが教育の現場に生まれてしまっていること。こうしたことに警鐘を鳴らしたいとのことだった。

この議論からは、言葉に惑わされて安易にそうした指導法に飛びつかないで、自身の教育現場の状況に合った指導法を丁寧に作り上げていくことの重要性について学ぶことができた。この他にも前半では先生方の中で様々な議論が活発に行われた。

会の後半は、フロア全体からの質問・コメントや研究推進委員から前もって寄せられた質問に対して、講師の先生方が回答するという形で進められた。様々な議論があったが、中でも以下は特に印象に残っている。

「エビデンスを使おうと思った時に、自分に都合のよいエビデンスだけを探して、ピックアップして、都合の悪いものは見なかったこと、なかったことにするということが行われていることに問題がある（エビデンスのチェリーピッキング）。」それを防ぐために、エビデンスを使う人の良心だけに頼るのではなく、研究を蓄積したメタ分析が行われるべきであり、それを参照するようになるのが一つの方向性として望ましい。少なくとも焦点が定まっているものに関しては、恣意的に作為が入り込めないような状況を作ることが研究者の仕事の一つではないか、ということだった。

また、追試（replication）がこの分野であまり行われていない原因として、オリジナリティ、独創性の過度な推奨が挙げられていた。追試は独創性がないということで評価されないままだと、常に先行研究とは異なる新しい指導方法や測定方法を用いることになり、研究が統合されて積み重なっていくことはなく、メタ研究もできない。ここが大きな問題であり、学会の口頭発表や論文査読において過度な独創性を求めることはやめるべきだというお話だった。他にも貴重なお話を数

多く聞くことができ、今後の研究の方向性を考えていくにあたり、とても学ぶことの多い座談会だった。

◇研修企画委員会報告◇

5月 月例会

日時：2022年5月14日（土）16:00～18:00

場所：オンライン（Zoom）開催

テーマ「新年度、新たな気持ちで英語教育を構想する―実践と評価の視点から―」
発表・報告者：中島義和（広島女学院大学）

本発表の目的は、参会者の方々に授業実践へのヒントやアイデアが得られることにあった。発表者の中学校での実践をベースに、英語教育の実践と評価を考える機会とした。自身の担当の児童生徒の「実態とニーズ」を想定して、その実践をアレンジやリメイクをする視点や教科等横断的な視点を持つての参加をお願いした。全ての前提として、授業は子どもたちあつてのもの、子どもたちとの相互作用であることを確認し、発表を始めた。

序盤では、新学習指導要領での評価について、3つの観点を中心に概観した。それぞれの観点で評価する際の評価材や要点などをおさえた。次に、新カリキュラムにおける授業づくりの視点（例：他者との協働的な課題解決、教科等横断的な学習等）を挙げ、発表者の授業構想・実践における意識事項、特に「課題解決」に焦点を当て、「英語で課題解決できる生徒を育てるためには？」というテーマについて議論した。「サンドイッチ型英語使用」をベースとする課題解決、課題解決の場面のある英語の授業の構造や体系、子どもたちの発達段階や英語の習熟度の実態、興味・関心やニーズを捉えた課題設定、解決するプロセスやステップ、その手法や技術などについてふれた。

中盤では、英語の授業での課題解決について、発表者の実践を3つの型に分類し、説明した。そ

れぞれの実践で設定される課題は、教師の鑑識眼を生かした「ジャンプの課題」として設定されるべきであることや、ヴィゴツキーの発達の最近接領域（ZPD）の話から「足場かけ」を適切に行うべきことを説いた。いずれにせよ、学習者の実態やニーズを把握していなければうまくいかない。これらをつかむところが授業デザインの入り口であることを確認し、具体的な授業実践紹介に入った。教科書を用いる日々の学習と音楽や映画・ALTとの英会話、さらに英語を活用した探究的な活動の3つのタイプの授業の具体例を評価とともに示した。探究的な活動例では、発表者による「ノシアック」モデルというプロセスに沿った、テーマ性のある3つの協働的課題解決型の授業を紹介した。

終盤は、参会者相互のグループセッションで、取り組みたい授業や授業構想のイメージなどを自由に交流した。その後、代表者による全体への共有がなされた。最後にまとめとして、活動における思考や振り返りや教師による動機づけ・意味づけ・価値づけの重要性を再確認し、幕を閉じた。



2. 授業実践のご紹介

4. おわりに

(2) 子供たちの「経験」の場と機会の提供
アンテナと引き出し：「ネタ帳」のすゝめ
世の中・社会・世界・「人」に敏感に 情報収集と整理
常に教材化の視点 授業化した際の評価の視点
ネットワークの構築
(人間の輪、教員仲間、教員以外の友達、老若男女問わず)
→「学校ならではの」仲間とともに取り組める
「英語を使いたい」という気持ちを誘発する
ちょっと「ハードル高め」な
「ワクワク」な課題設定の探究活動を提供へ

12

関東甲信越英語教育学会日誌

(2022年1月～2022年6月)

- 2月20日(日) 第6回運営委員会(14:00～17:15, オンライン開催)
- 3月6日(日) 第21回英語教育「なんでだろう？」座談会(10:00～12:00, オンライン開催)
テーマ:「英語教育におけるエビデンス」
講師: 亙理陽一先生(中京大学), 草薙邦広先生(県立広島大学), 寺沢拓敬先生(関西学院大学), 浦野 研先生(北海学園大学), 工藤洋路先生(玉川大学)
参考書籍:『英語教育のエビデンス:これからの英語教育研究のために』 亙理陽一・草薙邦広・寺沢拓敬・浦野 研・工藤洋路・酒井英樹 著(研究社, 2021年)
コーディネーター: 白倉美里(東京学芸大学)
- 3月21日(月・祝) 春季研修会(9:50～15:50, オンライン開催)
1. 授業実践報告(小学校)「指導と評価を一体化する言語活動の DIAMOND」
石毛宏尚先生(四街道市教育委員会指導課)
2. 授業実践報告(中学校)「指導と評価の一体化を目指すための授業づくり」
中島真紀子先生(筑波大学附属中学校)
3. 授業実践報告(高等学校)「<高等学校>新学習指導要領に基づく評価と授業のあり方」
村越亮治先生(玉川大学)
4. 講演「英語教師のための3つの新指導法・評価法」
松沢伸二先生(新潟大学)
- 4月24日(日) 第1回運営委員会(14:00～16:40, オンライン開催)
- 5月14日(土) 月例研究会(16:00～18:00, オンライン開催)
中島義和先生(広島女学院大学)
授業実践報告「新年度, 新たな気持ちで英語教育を構想する—実践と評価の視点から—」
- 6月5日(日) 第2回運営委員会(14:00～16:45, オンライン開催)
- 6月25日(土) 月例研究会(16:00～18:00, オンライン開催)
小林 翔先生(大阪教育大学), 田淵香奈子先生(大阪府立堺西高等学校)
授業実践報告「ICT を活用した英語授業実践—同期型と非同期型の取り組み事例—」

表紙写真「プチトマト」, p. 9, 10「学会新ウェブサイト」, p. 11「石毛宏尚先生の授業実践報告」, p. 12右, 13左「中島真紀子先生の授業実践報告」, p. 13右, 14「村越亮治先生の授業実践報告」, p. 16「松沢伸二先生の講演」, p. 18「中島義和先生の発表(5月月例会)」

編集後記

- ◆本号は、今年度からの役員や各種委員会の紹介と 2021 年度春季研修会を特集しました。指導と評価の一体化への理解を深める機会となりました。発表者の先生方には寄稿していただき感謝申し上げます。研究推進委員会からも「座談会」についてご執筆いただき、誠にありがとうございました。
- ◆2022 年 3 月末日、編集委員長、副編集委員長として、長年ご尽力いただいた久島智津子先生が退任されました。今まで献身的に携わっていただき誠にありがとうございました。また、岡野紗綾加さん、佐藤連理さん、丹藤慧也さん、西聖さん、本久郁子先生も退任されました。取材や編集へのお力添えに、改めて感謝申し上げます。2022 年度からは編集委員に伊東賢先生、小野由香子さん、樫村祐志さん、神村幸蔵先生、工藤大奈さんが加入されましたので、以下に自己紹介を述べていただきました。
- ・本年度より編集委員を務めさせていただくことになりました、伊東賢（茨城工業高等専門学校・筑波大学大学院生）と申します。学会業務に携わる中で、皆さまに英語教育に関する有益な情報をお届けできるように全力を尽くしてまいります。学会の仕事に携わるのは初めてとなりますので、至らない点も多々あるかと存じますが、どうぞよろしく願いいたします。
- ・本年度より編集委員を務めさせていただくこととなりました、小野由香子（筑波大学大学院生）と申します。学会の業務に携わるのは初めての経験となります。至らない点も多くあると思いますが、精一杯取り組んでいきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。
- ・本年度より KATE 編集委員を務めさせていただきます、樫村祐志（明治大学大学院生）と申します。初めはご迷惑をお掛けしてしまうこともあるかもしれませんが、自分なりに精一杯取り組ませて頂きつつ、多くのことを勉強していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。
- ・今年度より KATE 編集委員会に復帰いたしました、神村幸蔵（筑波技術大学）と申します。昨年関東を離れることとなったため KATE 編集委員の職を退いたもののこのたび復帰いたしました。再び編集委員の一員として学会活動の情報発信に従事できることを幸いに思います。今後ともよろしく願い申し上げます。
- ・本年度より編集委員を務めさせていただくこととなりました、工藤大奈（筑波大学大学院生）と申します。『KATE Newsletter』や『発表要綱』の制作など、初めてのことで至らない点もあるかと思っておりますが、精一杯努めてまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。
- ◆次号『KATE Newsletter』（2023 年 3 月発行予定）は、「2022 年度栃木研究大会」特集の予定です。

2022 年（令和 4 年）7 月 10 日 No.116

発行者 関東甲信越英語教育学会 代表者 西垣知佳子（千葉大学）

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学 臼倉美里

学会ホームページ <https://kate-jp.sakura.ne.jp/>

編集 関東甲信越英語教育学会編集委員会

〔委員長〕 森 好紳 (email: ymori@fc.hakuoh.ac.jp)

〔副委員長〕 田中菜採

〔編集委員〕 伊東 賢 小木曾智子 小野由香子 樫村祐志

神村幸蔵 工藤大奈 小室竜也 佐々木大和

鈴木健太郎 細田雅也 三上洋介 水書 亮